

平成28年度末に派遣を修了した大学院派遣教員に係る実践研究報告書

高知県立高知丸の内高等学校 教諭 酒巻 伸江

1 研究の成果と課題をふまえた平成29年度の実践内容

(1) 大学院における研究の成果と課題

大学院では、「高等学校における評論文読解力を養う指導の研究—読解方略を手がかりに—」という題目で研究を行った。高校生の評論文読解における読解方略の使用傾向の現状と、方略使用と読解成績との関係を実証的に把握し、評論文読解力の向上に効果的な指導案の枠組みを作成した。

まず、高等学校における評論文読解指導に対する課題を確認した。指導者は、「読み方を身に付ける」指導に課題意識を持ち、学習者は、独力での確に内容を読み取る力を授業で身に付けられていないと考えていることが明らかになった。続いて、先行研究より、課題解決策の一つとして読解方略に焦点をあて、その有効性を確認した。そして、高校生に「読解方略使用調査」と「評論文読解に関する調査」を実施し、高校生の読解方略使用傾向および方略使用傾向と読解成績との関係を確認した。また、調査結果を活用して、各質問の読解に対して有効と推測される読解方略を抽出した。さらに、読解方略を起点とし、方略の性質や働きに主眼を置きながら調査結果を分析し、高校生は、評論文読解において、読みの目的に応じて、方略を適切に選択し、使用する力に課題があることを確認した。確認した課題を、方略指導を手がかりとして解決することを目的とし、読解方略を効果的に使用する力を養成する学習指導案の枠組みについて考察した。学習者が認知した読みの条件に応じて、自立的に読解方略を選択・統合するための知識を獲得することに焦点を当て、それに関する先行研究を吟味し、「明示的教授」「二種類の「文脈」の設定」「他者との協同」の3側面を持つ枠組みとすることを確認した。また、同様の知識獲得を目的とした2つの実践事例およびアメリカの研究成果を検討している先行研究を参考にしながら、「学習者主体」という言葉をキーワードとし、次のような学習指導案の枠組みを作成した。

- ①読解方略の明示的指導
- ②ガイド（手引き）された実践
- ③他者との共同（「類似文脈」による読みの相互交流）
- ④「複数文脈」による個別の実践
- ⑤ふりかえり

学習指導案の枠組みは作成したが、具体の指導案の作成にはいたらなかった。現在の高校生の評論文読解上の課題である、読解方略をテキストや読みの目的に応じて使用できる力を養う指導案を、今回の研究成果をもとに作成することが課題である。

(2) 平成29年度の実践内容

本年度は、読解方略の獲得・選択・活用を意識した学習指導を手がかりに、生徒の評論文読解力を養う具体の授業展開を明らかにすることを目的に実践研究を行った。昨年度に作成した指導案の枠組みを、実際の教材に落とし込み、具体の指導案を作成し、結果を検討した。

研究方法は、以下のとおりである。

ア 生徒の現状確認

実践研究における目指す生徒像と、生徒の課題やニーズが合致しているかどうか、また、生徒がどういった指導を求めているのかを明らかにするため、基礎力診断テストの結果分析やアンケート調査を実施した。

イ 第1回目の研究授業およびそれに関わる単元の指導

生徒自身が意識的に読解方略を使用して、短い範囲の評論文を読む授業を行った(表1)。

ウ 第2回目の研究授業およびそれに関わる単元の指導

生徒自身が読解方略を使用して、一つの完結した評論文を読むことを意識した授業を行った(表2)。これまでに学習した筆者の主張を捉える方略の主体的使用と、評論文全体を把握する際に必要と考えられる方略の学習をねらいとした。また、単元の最終学習として、初見の評論文を要約する指導を行った。

エ 研究授業結果を踏まえての授業改善

表1 学習の展開 (7月5日)

	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	① 本時の目標を確認する。 ② 本時の活動内容を理解する。	○これまでに学習した読解方法を提示し、本時が読解方法学習であること、方法を自覚的に用いて読む学習であることを意識させる。 ○本時の流れを説明する。
展開 35分	③ 読解方法を確認する。 ④ 本文を通読する。 ⑤ 教師による読解方法を用いた読解の様子を観察する。 ⑥ 第2～4段落を読み、「日本人の『飯』」を定義する。 ⑦ ペアおよびグループでそれぞれの解釈について話し合う。	○以下の方法を確認させる。 ・既習の方法「題名や、キーワードに注目する」、「逆視・否定・対比などの接続表現に注目する」(○で囲んで大事なところに線を引く)、「要約表現に注目する」、「具体例の前後に置かれる抽象論に注目する」(抽象論は傍線、具体例は()) ・新方法「テーマを把握する」(題名や反復・展開表現を活用する)、「『 』」などで括られている言葉が、本文中でどのような意味で用いられているかに注意する」「強調表現に注目する」(「○○は、……である。」「…べきだ」、「重要」「大切」、「こそ」「だけ」「まじく」などに○をし、含む部分に線) ○筆者の主張を考えながら通読させる。 ○本文を印刷した横道紙を提示し、方法を用いた読みの手本を示す。 ・第1段落を読み、「日本人の『飯』」について定義する。 ○「指示した方法に限定しなくてもよい」ということを指示する。 ・本文の内容に即したワークシートを用いる。 ○ペアでの活動が終わったら、3～4人のグループで行わせる。 ・それぞれの解釈を話し合わせる。 ・その考えに至った理由や読み取る際に使った方法なども交流させる ・交流しながら、気づいたこと、大切だと思ったこと、改めてわかったことなどをメモさせる。
まとめ 5分	⑧ 本時の学習内容をふりかえる。	○授業評価票を活用して行わせる。

表2 学習の展開 (11月8日)

	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	① 前時の学習を確認する。 ② 本時の目標を確認する。 ③ 本時の活動内容を理解する。	○読解方法を意識して文章を読んだことを確認させる。 ○本時の目標を板書して示す。 ○本文の構成、展開、要旨などを的確にとらえ、要約し、他者と交流・比較することを促える。
展開 40分	④ 学習した読解方法を確認する。 ⑤ 読解方法を活用して、本文を読解する。 ⑥ 構成・展開を確認する。 ⑦ ワークシートを用いて要約する。 ⑧ 各自の要約をグループやペアで発表・交流する。	○ペアで確認させる。 ○教科書に書き込ませながら各自で読解させる。 ○ワークシートを用いて、三段構成であることと、どのように展開していくかを確認させる。 ○単なる情報の縮約ではなく、要旨や構成をふまえて要約することを意識させる。 ○それぞれの要約を讀んだ後、自分の要約について説明する。その考えに至った理由や読み取る際に使った方略なども解説する。交流しながら、気づいたこと、大切だと思ったこと、改めてわかったことなどをメモする。
まとめ 5分	⑨ 本時の学習内容と次時の予定を確認する。 ⑩ 授業評価票を活用してふりかえりをする。	

2 平成29年度の実践の成果と課題

成果として、昨年度の研究に基づいた具体的な指導案を作成し、評論文読解指導ができたことが挙げられる。その結果、生徒に読解方略を活用して評論文を読む力を育み、読解方略の有用性を認識させることができた。また、対話的学習において、読みを深めるためによりよい方略を選択しようとする

力を向上させることができた。さらに、生徒の授業評価結果から、構成を考え、評論文全体を大枠で捉える学習をすることにより、その評論文読解に対する漠然とした不安を解消に導く可能性があること、読解方略を活用した評論文読解指導には、十分な演習の時間の確保が重要であることがわかった。

課題として、評価方法の不十分さが挙げられる。評論文読解力を養う授業展開を明らかにすることをねらいとした研究であったが、評論文読解力の向上は、要旨の要約の変容や授業評価結果からうかがえるものの、全国模試等の数字としてはわかりにくいものであった。模試における全国偏差値は、評論文分野のみを示すものは記されておらず、評論文読解力を図る指標としては不十分であると言える。新たな仕様の開発が必要である。